

巻頭言

都会人の足

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

明 治の末期にこの世に生を受けた筆者は、18歳の時から3度にわたって、郷里茨城から上京してきた。そして弁護士志願という進学の方法がきまって落着いた。

その上京以来、東京の人が、今ではバス停、昔はたった1箇所の電停でも、乗り物に便乗しないと、気が済まないという行動が私には分らなかった。

しかし「末は博士か、大臣か」といわれた赤門の秀才たちの自傳などを読むと、たとえば赤羽橋から赤門まで、ホーバの高下駄を履いて通学したと、そのコース等を示している。従って乗物の便のなかった当時は、彼らは田舎者となんら変りがなかった。

ところが、私が80歳を越えてみると、スグ目の前をバスが走っているのに、それを利用しないのは、損をするような気がして、結構、利用してしまう。都会人のセンサイな損得勘定と思える。

ところが、新しい悩みが生じた。バス停を見ると、お爺いさん、お婆さんは、行列をつくって順序よく待っているのに、15~16歳の娘ッ子は、みな手を挙げてタクシーを利用している。それも、働きに行っている年齢層ではなくて、小遣いを貰って、すべて親のスネ嚙りクラスである。まったくおかしい話である。この調子で、家計をやり繰りされては、亭主の稼ぎでは間に合わない。「わたしもバイトに出る」ということになる。

一方、私の親友に、糖尿病に罹っている重患がいて、病院を出たり、入ったりして長いことになるが、その治療法として、奥さんを連れて、新宿までバスで行き、それから町内まで歩いて帰ってくる。それが身体にいいと言うのである。すべての糖尿病患者の犠牲となって、わたしの友人だけが、歩かなかった責任をとられ、その歩行の結果に応じてそれまでの責任を免除されているなどということはないから、まったく別個の原因結果であろうが、都会全体とし、歩行をきらっていることが、糖尿病治療というような結果と結びついていることは、不思議でもある。

街を見ると、車の氾濫、オートバイの洪水、女性の自転車利用、兎にも角にも、都会人は道路を自分の足で歩いていないことは確かである。病院に行くようになってから、国が治療費を負担してくれることは有難い話であるが、国費を負担する国民の側になって考えてほしいものである。

大 都会の交通ルールは、いちおう確立したように見受けられるが、生活ルールそのものは、必ずしも完全とは申し難い。しかし、そのルールの確立は必要である。広く、生活の立場から都会人の足の行政的確立が必要なのではないかと考えるが、どうだろうか。

結局、国民の負担税額は、国民全体が負担していることを忘れてるように思えるのである。